

2016.07.31

社会システム研究科
地域コミュニティ専攻
菅谷香織

インドネシア・西ジャワ地域におけるムスリマのジェンダー規範 イスラーム教義・家庭・教育が及ぼす影響

要旨

インドネシアは1,800もの島々から成る島嶼国家で、日本の約5倍に値する国土におよそ2億5,500万人もの人々が住んでいる。また、300もの民族集団が200から400の使用言語を有しており、東南アジアでも類をみない多民族国家である。よって歴史的には、多言語・多民族、多様な文化・生活様式を有する独自の独特な文化を形成してきた。

宗教についてしてみると、インドネシア国家五原則の第一原則に、「唯一なる神への信仰」とある。つまりイスラーム教に限らず、プロテスタント、カトリック、ヒンドゥー教、仏教の5つの宗教を公的に容認し、信仰の自由を保障しているのである。インドネシアでは、イスラーム教は必ずしも土着的宗教として存在していなかったのであるが、実際にムスリム人口が爆発的に増加しており、現在では、国民の88%がイスラーム教徒であり、世界最大のムスリム人口を有する特異な国家である。

イスラームといえば、一般的にジェンダーバイヤスのかかった女性蔑視の宗教であるという見方が多い。一方で、西洋においては、19世紀末より男女平等を求めた運動が始まり、今世紀に至るまで様々な試みがなされてきた。この3世紀にわたる西洋フェミニズムの運動や思想は、今では世界女性会議を経て、ジェンダー主流化と女性のエンパワーメント政策が大きく打ち出されほどの功績を残しており、世界のスタンダードとなっている。インドネシアにおいても1995年に採択された北京行動綱領を受け、1999年にインドネシア国策綱領にそれを明確化させている。このように国家はジェンダー主流化、そして女性のエンパワーメント政策に向かっているが、果たして母性主義に基づく家父長制を文化として持つインドネシアは、ジェンダー主流化への新たな転換を迎えることができるのであろうか。本論文では、西ジャワ地域のムスリマたちが、イスラームの学びからどのようなジェンダー規範を形成し、構築しているのかを明らかにするものである。

実際に、ジェンダー主流化についてインドネシアは独自の道を歩んでいる。革新派ムハマディアの傘下の女性組織：アイシャは、ムスリマの地位向上を重視する活動を幅広くおこなっている。クルアーンにも「イスラームは私たち女性が進歩に関わろうとすることを決して禁止していない。」とある。しかしその方法は、西洋的女性解放とは異なり、常にイスラームに基づくものでなければならないとされている。つまり、西洋的な女性がなににつけても男性と平等、または対等であり、男性が役に着けば女性も同じように役に着くと

いったようなものではない。常に、イスラームの教義に反しないあり方を模索することが求められ、それは西洋的な自由や進歩とは必ずしも一致しないことが主張されている。

クルアーンには、信仰する人間の平等性をもっとも重要であるとされおり、性差なく尊重されるべきであるとしている。蜜蜂章第 97 節には「男性・女性にかかわらず善行をおこない信仰する者に対して、この世でよい生活をその者に与えよう。一方、来世では現世でおこなった善行よりもはるかに素晴らしいものを与えよう。」とある。ここで、善行を行ったものに対しては男女を問わず人間として平等であるが、だからといって男女の扱いがまったく同じであることは意味していない。男性と女性は異なるものであり、男女の違いへの対応も必要であるという理解がイスラームの基本的な考え方である。

アラビア語で「コドラット」とは、神によって決められた人間の先天的な特徴を意味し、男女の違いもこれに含まれている。つまり、社会的・文化的に作られる性差を意味する西洋的ジェンダーとは基本的に異なるのである。

「男性は女性の擁護者（家長）である。それはアッラーが一方を他よりも強くなされ、彼らが自分の財産から（扶養するために）、経費を出すためである。」これは女性章第 34 節であり、この句からは、家庭内における男女の性的役割観をみてとれる。

西洋的には、性別役割分業はジェンダーバイアスであるとされるが、イスラーム社会、ことさら今回調査にあたったインドネシア・西ジャワ地域における性別役割分業は、ムスリマたちの中でイスラーム教義として理解され許容されていた。特記すべきは、今回の調査において、コメントをくれたムスリマたちはこの性別役割分業をネガティブに受容しているのではなく、むしろ積極的にイスラーム社会の中でのイスラームを学び、それを個々に解釈・理解し、イスラーム的規範を形成・変容させ、誇り高く生きているのである。